川上 高司 ブログ アーカイヴ

2013年

6月6日

ドニロンの退任は何を意味するのか①

6 月 5 日、オバマ大統領は国家安全保障担当補佐官のトム・ドニロンの退任を発表した。それに伴い後任はスーザン・ライス国連大使、新たに国連大使にはサマンサ・パワーが就任すると発表された。

ドニロンは 1 期目から引き続いて補佐官を務めていた、オバマ大統領の外交政策の要ともいえる存在である。その要となる人物が突然交代するというのであるからさまざまな憶測がアメリカの政治ウォッチャーの間では飛び交っている。しかも、5 月 28 日付フォーリン・ポリシー電子版にはドニロンと他のスタッフとの不協和音を伝える記事が掲載されたため、オバマ 2 期目は閣僚間にすでに亀裂がはいったのではと誰もが勘ぐるのは無理もない。

そのうえライス氏やパワー氏はタカ派リベラルとして知られ、人権重視で人道的見地から軍事介入も辞さない人権強硬派である。そのためリビアの軍事介入に非常に積極的であった。この 2 人が外交政策の要所に就くということは、オバマ政権はいよいよシリアへの軍事介入を念頭に置き始めたのかと、懸念と期待が入り交じった憶測が生じても不思議ではない。

そもそもドニロンは前任者のジェームス・ジョーンズ補佐官の辞任にともない副補佐官だった彼が昇格し、以後 4 年間オバマ政権の外交政策を文字通り仕切った。彼は裏方の仕事が好きで会議や入念な情報収集を行い猛烈に働く人物だった。そのため部下や周囲の者も猛烈に働くことを余儀なくされた。確かに「ドニロンは部下を酷使したが、大統領はドニロンをそれ以上に酷使した」といわれているほどドニロンはひたすら仕事に邁進していたが、部下の不満が辞任の原因になるほどではないだろう。

昨年末にドニロンは実は辞任を申し出ているのだが、ケリー国務長官とヘーゲル国防長官が就任し政権が順調に滑り出すまではとどまって欲しいとオバマ大統領がひきとめたという。ケリー氏もヘーゲル氏もホワイトハウスでの政治経験がない。そのため政権運営がスムーズにスタートを切るためにはドニロンの力が必要だったのだ。それほどドニロンの存在は政権内では大きくなっていたということだ。

6月6日

ドニロンの退任は何を意味するのか②

そもそも国家安全保障担当補佐官の仕事は、国務長官や国防長官などの閣僚たちの調整役である。だが、ケリーもヘーゲルも上院外交委員会の同僚で外交政策においては方向性はほぼ一致している。しかもケリーとヘーゲルは週 1 で大統領と会合を持つほどに親密である。いまさら調整は不要であろう。ケリーとヘーゲルの活動が軌道に乗

りつつある今、ドニロンは自らの役目は終えたと思っているに違いない。

前にも述べたように大統領、副大統領、ケリー、ヘーゲルの 4 人は誰が大統領であってもおかしくないほどの重鎮ばかりである。その中で若いライスがどこまで意見を言えるだろうか疑問符がつく。むしろ次の大統領選挙を睨んだ人材育成の意味が含まれていると考えるほうが納得がいく。

またこれまでの習慣に従うなら副補佐官であるブリケンが昇格するはずであるが女性の閣僚がいないことを考慮し、重要ポストへの女性の登用という側面も否めない。実務は副補佐官のブリケンが引き継ぐのであれば、ライスがタカ派リベラルであっても政権の外交政策はそれほど影響は受けない可能性が高い。

米中会談と G8 が無事終了することを見届けてドニロンはライスへとバトンを渡すと見られている。ドニロンの退任は、オバマ政権の外交政策の基盤がしっかり確立されていることを意味するのである。

6月13日

「希望」が「憎しみ」に変わる時ーシリア内戦の前線からのレポート

（The Nation 電子版）

シリアの北部、トルコとの国境近くにあるアレッポは古代遺跡の残る世界文化遺産ともなっている街だ。2011 年に始まったシリアの民主化運動はアレッポをも容赦なく巻き込んだ。ここは反政府勢力が制圧していた街だがいまでは政府軍の熾烈な攻撃にさらされて追い込まれている。世界的にも貴重な文化遺産はがれきと化し美しい街並みはどこにもない。

アメリカの The Nation 電子版（6 月 5 日付）には、アレッポに拠点を置く反政府勢力の最前線からのレポートが掲載された。以下、抜粋してまとめてみた。

＊＊＊

自由シリア軍（Free Syria Army:FSA） のアブドル・カリームは長男を戦闘で亡くした。親族全体では 7 人を失い、6 人が FSA に加わっている。そして親族の 5 歳のこどもを最近亡くした。彼は親政府軍の民兵たちが殺害したと思っている。「のどを切られたんだ。その手口は連中のやり方だから、間違いない」

1 年前はカリームも他のみんなと同じように希望と理想を抱いていた。今は苦しい闘いを強いられている。「もう夢なんてないよ。だれもシリアの将来なんて考えてない。ただアサドを倒すことだけがすべてさ」ということばにはなげやりな雰囲気が漂う。そこには後戻りできないという絶望に近いものが横たわっている。「相手が死ぬか、こっちが死ぬかしかない」

どうしてそこまで行き着くのか。「5 歳のこどもが殺されたんだ。連中を許せない。だが」とカリームは続ける。「憎しみが希望や夢を上回ってしまったらおしまいさ」と自嘲気味に笑う。そうなりつつあると彼は言う。

シリア軍にはヒズボラが流入している。一方反政府側にはアルカイダと繋がっている過激派組織アル・ヌスラが参入している。カリームはアル・ヌスラは勇敢な戦士たちだという。彼らはシーア派が嫌いだ。死を全く恐れないから強いし人気がある。だが、この内戦に勝利したらだれがこの国を率いるのか。その答えはない。シリアでは、アフガン人、クルド人、北アフリカ系などいろんな外国人が戦闘に参加している。この国をどうしたいのか、だれも考えていない。もうシリアの将来には絶望しかない。

それはカリームが一番よくわかっている。闘っているのは外国人でシリアの国民は難民となって国を追われている。

イラクやレバノンでもシーア派とスンニ派の闘争が始まるだろう。この宗派闘争はシリアだけでは終わらないとカリームは言う。最初は本当に自由を求める運動だった。いつの間にか憎しみが夢を超えてしまった。「希望」が「憎しみ」に変わったのだ。だからシリアの内戦は終わらない。

＊＊＊

サウジアラビアでは 7 日、スンニ派の聖職者が「ジハード」をテレビで呼びかけた。「若者よシリアをめざせ。いまこそジハードだ」

今こそ国際社会がシリアの内戦に取り組まなくてはならない。

6月15日

米中が「お互いさま」で引き分けたサイバーアタック問題

6 月 7，8 日の米中会談ではサイバー戦争は大きなテーマだった。中国からのサイバーアタックやハッキングのしつこさに対して、オバマ大統領自らが米中会談で苦言を呈し追及するはずだった。だが、米中会談が終わってみればサイバーアタック問題は淡々とやりすごされた。それはオバマ政権が思わぬところからパンチを食らったからである。アメリカは積極的に電子情報の監視を行っていると、会談直前にリークされたのだ。

米中会談が予定されていた前日、英ガーディアン紙に「NSA（アメリカ国家情報局）は、国内外で電話回線を監視している」とのリーク記事が掲載された。さらに 7 日には、「PRISM］という機密プログラムの存在がガーディアン紙に暴露され、世界中の話題をさらった。これは、NSA がグーグルやフェイスブックなどのプロバイダーを通して個人情報やメールなどを収集することを可能にしたプログラムである。2007 年にはマイクロソフト、2008 年にはヤフー、2009 年にグーグル、フェイスブック、2010 年にはユーチューブ、2011 年にはスカイプや AOL、そして 2012 年にはアップルがこのプログラムに参加し協力している。NSA はこれらのプロバイダー回線を使って契約者のメールや会話、ドキュメントなどネット上を駆け巡る電子情報を直接かつ思う存分に収集できるようになっている。

ブッシュ政権は 9.11 テロ後、テロとの戦争を宣言して電子情報の監視に乗り出した。そのとき国民はテロの直後ということもあって「仕方ない」と監視や盗聴を受け入れた。だが 10 年が過ぎイラク戦争も終結している今、リベラルな大統領の下でさらに監視が強化されていたということに国民は驚愕した。ギャロップ社の直近の世論調査によると、盗聴やネット監視を是とする国民はわずか３７％、５３％が反対している。

百歩ゆずって、アメリカ国民は自らの大統領の政策だから甘受できるかもしれない。だが他国にとってはなぜ監視されなければならないのか、根拠も正当性も全く見つけることができない。このネット監視はアメリカ国内に留まらず国際問題に発展しそうである。ドイツでは自国が監視されているのかどうかの疑惑が国民の間で大きくなり、来週開かれるオバマ大統領とメルケル首相との会談では監視疑惑は大きなテーマになる可能性が高い。オバマ大統領はヨーロッパで批判の嵐にみまわれる覚悟が必要だろう。さらに NSA は数年来中国や香港のネット監視を行っていることが今回の

リークで発覚した。この点に関しては中国政府はアメリカ政府に真偽を質すつもりのようである。

6 月 6 日、オバマ大統領はカリフォルニアで民主党の支援者である IT 企業の幹部たちと会合を開いていた。参加していたのはアップルやグーグルなどまさにネットの巨人たちであり、PRISM に協力している企業である。その会合にあわせてのリークだったのかどうかはわからないが、このリークで会談でのサイバー問題のトーンが下がったことは間違いない。中国にしてみればサイバーアタックもネット監視も「お互いさま」で、ひきわけに持ち込むことができたのである。このリークは中国にとっては絶妙のタイミングだった。

ちなみにロシアのプーチン大統領は「国家の情報収集は違法ではない」とオバマ政権を擁護している。サイバー問題でも米中露は協調路線を行く。

6月20日

G8の憂鬱ー米露協調を頓挫させたシリア問題

シリアの内戦はますます混迷を深めつつある。イランは、革命軍 4000 人をシリアへ送る予定だ。アメリカは 300 人の海兵隊をヨルダンへ送った。その上シリア政府が化学兵器を使用したとして反政府軍のシリア自由軍（SFA）へ武器の支援をすると発表した。さらにサウジアラビアは対空ミサイルを反政府軍へ供給するつもりである。

シリア内戦は周辺国や外国がこのような介入をするためますます長引いている。前回レポートした最前線の兵士は外国からの支援がなければ戦闘は「10 日で終わる」と断言した。支援があれば 10 年でも戦えるというのだ。

シリア国際会議もケリー国務長官とロシアのラブロフ外相が共同開催を宣言したものの反政府軍側が出席を拒否しているため開催の目処すら立っていない。今回北アイルランドで開催された G8 でもシリア問題は重要な議題だった。だが、終わってみれば米露の溝は埋まらず、「シリア国際会議開催に向けて協力していく」という確認をし、「政治的解決だけがシリアを救う」という点で一致しただけに終わっている。

ロシアのプーチン大統領がアサド体制の支援において一歩も譲らなかったからである。もちろんアサド政権の維持についても断固として辞任を容認しなかった。今回プーチン大統領は妥協の余地のない強い姿勢でシリア問題に臨み、西側諸国は押されっぱなしだった。

武器支援の根拠としてオバマ大統領は化学兵器の使用を主張したが、ロシア側は「根拠が薄い」と一蹴している。ロシアだけでなく多くの国がイラク戦争開戦前を忘れてはいない。当時のパウエル国務長官は国連の場で、試験管をふりかざして「これがフセインが化学兵器を所有している証拠だ」と述べた。その証拠が確固たる証拠でなかったことはその後の 10 年に及ぶ戦争が証明している。その再現ではないか、と各国が危惧しても不思議ではない。あまりにも状況が似ているのだ。

アメリカ国民も忘れてはいない。ピューリサーチセンターの世論調査では７０％が武器支援に反対している。米軍もイラクから撤退しアフガンからの撤退もようやくゴールが見えてきた今、再び中東で終わりのない軍事行動を始めることには後ろ向きである。

今回の G8 ではこのようにプーチン大統領がシリア問題で孤立したという見方ができる。だが逆に見ればイラク戦争で英米の暴走を止められなかったロシアが今回は

ブレーキをかけることができたということであり、オバマ大統領も踏まれたブレーキの効きを感じとったということでありこれは大きな意味がある。ロシアはシリア問題で孤立したがアメリカはロシアに耳を傾けた。やはりシリア解決には米露の協力以外に鍵はない。

6月23日

進化するオスプレイーパリ航空ショーで再デビュー

フランスでは第５０回パリ・エア・ショーが 6 月 17 日から 23 日まで開催されている。民間機から戦闘機まであらゆる飛行機が集まり、世界中の期待と注目を集めるこのショーは格好のセールスの場でもあり、空飛ぶ夢をかき立てる新型飛行機のデビューの場でもある。かつて傾斜式ローター航空機として開発された XV-15（後の通称オスプレ）は 1981 年にこの航空ショーに出典して話題をさらった。

あれから 30 年あまりが経ち、その間に傾斜式ローターは V-22「オスプレイ」として実用化された。そして新たな傾斜式ローター航空機が今年のショーではデビューした。傾斜式ローターの民間機の開発を行っているオーガスタウエストランド社が出典した新たな飛行機は、「プロジェクトゼロ」と名付けられた開発プログラムによって密かに研究されていた。エンジニアたちの夢を形にしたというこの傾斜式ローターはわずか６か月で完成し、2011 年と 2012 年にひっそりとテスト飛行を繰り返していた。そのためこの飛行機に関する論文もなく、世界でただ 1 機の夢の飛行機である。

この飛行機は無人ですべて電子制御であるため軽量で騒音も少ない。外見はヘリコプターでもなく戦闘機でもない。強いて言えば B-2 ステルス爆撃機の翼をくりぬいて巨大なファンを左右にはめ込んだような形だ。3 枚ブレードは、これまでの傾斜式ローターの技術を継承している。オーガスタウエストランド社は、傾斜式ローターを用いた民間機の開発を以前からベル社と協同で行っていたが、ベル社が V-22 の製造に忙しくなったため単独で民間機の開発を一手に担うようになり、この新型航空機の開発に成功した。

傾斜式ローターの開発が始まってから 60 年以上が経ち、いまではグローバルに高度なテクノロジーを結集することができるので開発ペースは格段に上がっている。

だが、エンジニアたちの傾斜式ローター航空機にかける夢は変わらずその夢が成功の原動力になっているのだ。かつて傾斜式ローターに取り憑かれてその開発に人生を捧げたロバート・リッチェンやケニス・ワーニックも夢を追いかけて傾斜式ローター航空機 V-3 や V-15 を世に送り出した。プロジェクト・ゼロのエンジニアたちもきっとそうだったのだろう。傾斜式ローターは進化し続けまさに次世代の航空機になるのかもしれない。

6月29日

シリア論争ーシリア政策で2つに割れるオバマ政権

アメリカは反政府勢力であるシリア自由軍に武器の支援をすることを表明したが、その武器がアルカイダや他の過激派組織に流れないかどうかが最大の心配ことである。シリア自由軍に武器を過激派組織に流さないように強く念押ししているが、実際にはどこまでそれが守られるのかはわからない。

武器支援を強く推進したのはケリー国務長官である。最近ではシリア関与に積極

的なケリー国務長官と、消極的なヘーゲル国防長官・ディンプシー統合参謀本部議長が対立している。シリア上空に飛行禁止区域を設けることに関してケリー長官は積極的であるが、統合参謀本部議長はやれないことはないが、と反論している。飛行禁止区域を設けるとなるとやれなければならないことがたくさんあり口でいうほど簡単ではないし、何よりも「飛行禁止区域を設定するというのは戦争行為そのものなのだ。戦争する前にできることはあるはずだ」と厳しい。

彼はケリー長官が空爆を主張する際にも、「出口戦略がなければ空爆はしない。空爆のもたらす結果について国務長官にはきっちり認識していただきたい。それが空爆より先だ」とつっぱねた。もちろんヘーゲル国防長官も統合参謀本部議長の意見を全面支持している。イラクとアフガニスタンの戦争でアメリカは出口を見つけるまでに 10 年の歳月と多くの犠牲を払ったことはまだ過去というには新しすぎる記憶である。介入すれば結局消耗して痛手を被るのは軍で三度同じことを繰り返すのはごめんだ、という思いが２つの戦争を経験した統合参謀本部議長にはあるのだろう。

オバマ大統領自身はシリアへの深入りには慎重であるし、新たな戦争を始めることはしたくない。大統領は「軍事介入はシリアにとってもアメリカにとっても良いことはひとつもない」とかつて語ったが、おそらくオバマ大統領の本音だろう。だから 2 年もの間静観を決め込んでいたのだ。だがシリア国際会議の開催の目処は立たず、シリアの難民や犠牲者は増える一方である。

それでも希望はある。ロシアはシリア内にあるロシア海軍基地のタルタスから軍人を引き揚げ民間人に置き換えた。その理由はロシア側からは公表されていないが、シリアの国際会議に向けてのなんらかの交渉が継続している可能性を示唆している。

「戦争の前にできることがあるはずだ」

ディンプシー統合参謀本部議長の言葉は重い。